
この声が君に届きますように

嘉沢柚杞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この声が君に届きますように

【Nコード】

N9800K

【作者名】

嘉沢柚杞

【あらすじ】

僕の声がいつか、君に届くだろうか。

辛い過去により声が出なくなった少年と王道生徒会長の、のんびりとしたラブコメディ。

（総受け風味。）

第一話

目を覚ますと、そこには黒い物体があった。

「……は？」

何回か瞬きをして目をこする。すると段々視界がクリアになっていく。

「ん」

指でちゃんと突付いてみるとその黒いのはびくりと反応を示した。

「!？」

俺はビックリして机に突っ伏していた体を勢いよく起こす。

驚いて目を見開いたため、はつきりと物が見えるようになった。

「つて」

人？

それは1人の人だった。

昨日までそこは空席だったため、驚いてしまった。

ひとつ息をつくと椅子を引き、姿勢を正した。

すると前に座っている黒い奴がゆっくりとこちらを向いた。

顔を見て、一瞬で外から来た奴だなと思ってしまった。

外、というのは外部生のこと。

俺が通うここ、**星丘学園**は全寮制の初等部からある、大学までエスケーター式の男子校だ。だんしこう

そんな男苦しいこの学園に通うのは、どこかの有名株式会社社長の息子や、富豪の息子……つまり金持ちだ。

もちろん裕福でなくてもこの学園には入れるのだが、この学園は金持ち以外には容赦しないらしく、入試（もしくは編入試験）の、9割以上を正解しなければならんだそうだ。

この前その試験とやらを見せてもらったんだが……この俺でも貧血を起こしてしまうような問題の量と難しさだった。

だから、金持ち以外がこの学園に入ることは本当に稀だ。

そんな事実を知った上で何故俺がコイツを外部生だと思ったかというと、容姿だった。

まず俺が驚いた真つ黒な髪。

振り向いた顔にあったのは地味なめがね（フレームは黒）、前髪は長く、ただでさえあまり見えない目を隠していた。

肌の色も白い。透き通るように白かった。

つまり、見た目が真面目というか、オタクというか、地味だったからだ。

まあ、見たことない顔だったというのもある。

——へえ、コイツがあんな難しいテストで9割の点数取れるんだ。

黒い奴はこっちを見て、ぺこりと頭を下げた。

俺も頭を下げ、言う。

「初めまして。榎木京斗かしのきけいとです。よろしくね」

いつもの笑顔をしてそう言った。

黒い奴はそんな俺の顔をじいっと見て、コクリとひとつ頷いた。前に向き直った。

——……へ？

普通こういうときはどもりながら宜しくだのいうか、赤くなりながらハイとか言うんじゃないのか？

俺は自分の容姿は理解しているつもりだ。

栗色の髪に切れ長の奥二重の目。そこそこ足も長く、結構モテる方だ。

だから、いつもの笑顔をすれば男女、大人子供関わらず一瞬でも見とれていた。

男女関わらず、だ。

だから俺はさっきもいつもの笑顔をした。

なのにこの黒い奴はどうだろう。何も反応せず、加えて声も発さず、顔を背けた。

少し、悔しい。

外部生と言うものはこういうものなのだろうか。

そんなことを考えながら首をひねっていると教壇に立って話をしていた担任が俺の名前を呼んだ。

「はい」

「後で木村に学園内を案内してもらってもいいか」

「分かりました」

担任は俺が頷いたのを見ると、教壇を下りて教室を出て行った。

——面倒くさいな。

気づかれないように小さく小さくため息をつく。

——仕方ないか。

生徒会長だからな。

第二話

「ここが音楽室」

「ここ美術室」

「購買」

面倒臭くて段々と発する言葉が短くなっていることに気づいた。だってコイツ、一言も喋らないんだもん。

何かしても、頷くぐらいしかアクションがない。さすがの俺でも限界だ。

「こんなもんかな。後はあんま使わない教室だったりで、案内しなくても良いだろうし……。慣れもあるしな」

そう言って木村をちらりと見ると、頷いていた。だろうね。

「あ、そうだ。食堂案内するの忘れてた。昼食も有るし、行こうか」
木村はまたひとつ頷いた。

大きな扉を開くと、黄色い歓声が俺にふりそそいだ。

「……」

木村も少しビックリしているようで、初めて少し、目を見ることが出来た。

「さ、行こう?」

いつもの様に、生徒会ブースへと続く通り道を歩き出す。ちょこちょこと歩く黒いのも視界に入れながら、だ。

歓声に笑顔で応えると、黄色かった歓声がもっと強くなる。

だが、俺の後ろについて歩く木村を見ると少し小さくなった。

「誰、あいつ」

「地味」

ボソリボソリとつぶやく声が時折聞えてくるのは気のせいではないだろう。

一応親衛隊の奴らに話をしないとな。

近くにあったテーブルに木村を案内し、座らせる。

「食堂の使いかたはいたって簡単。席に座ってからカードキーを差し込んで、パネルで注文するだけ。すぐにウエイトレスさんが来るよ。」

食器とかはほうっておいて良いからさ。じゃあ、俺は別の人と食べるので」

少し冷たい説明になってしまったが、いいかげん俺だけが話し続けるのもしんどくなっていたので気にせず生徒会ブースへと向かった。

ため息をしながら二階にある生徒会ブースへと階段を上る。

階段を上りきるとそこにオレンジ色の頭と、同じくオレンジ色の瞳をした男がいた。

「早いね、京斗」

爽木楊。さわきよう俺率いる生徒会の会計を務めている。

「さっきの誰え？」

席に座ると、いつものように間延びした声で聞いてくる。

「編入生の木村」

「ふーん。珍しいねえ、京斗が人相手に疲れた顔するのってえ」

ニヤニヤとしながら俺を見つめてくる楊。

まるで観察をしているかのような、羽化する長を見ている小学生のような、そんな目で。

「その目止める」

「え？ あ、ごめーん」

ヘラリと笑う彼に対し小さくため息をついた。

——まあ、こいつも好きでこんな事をするようになった訳じゃない

いしな。

「あいつ、俺が喋っても笑っても何も反応しないんだよ」

「反応しない？」

楊はクスリと笑った。

「ああ、俺のこと見ても赤面も笑いもしない。それに加えて一言も喋らない」

「……」

俺の話を聞いて一瞬驚いた顔になったようだが、それは本当に一瞬のことで、またいつもの性悪な顔に戻った。

「へえ、面白い」

楊が考え事をし始めた頃、他の奴らも来た。

生徒会の残りのメンバーだ。

楊はぱつと顔を上げると、心底楽しそうな笑みで言った。

「ねえ聞いてー。今日来た編入生、京とのことを見てもずっと喋らないで無表情だったんだってえー」

——やっぱりな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9800k/>

この声が君に届きますように

2010年10月9日16時38分発行